



漢詩「黄鶴楼」教材考：
崔顥詩と李白詩の受容をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樋口, 敦士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000159

漢詩「黄鶴楼」教材考―崔顥詩と李白詩の受容をめぐる―

樋口敦士

一 はじめに

現在、「黄鶴楼」と言えば、誰しも定番教材である李白の漢詩「黄鶴楼送孟浩然之広陵」を思い浮かべることだろう。これに對して盛唐の崔顥の漢詩「黄鶴楼」は古来より名高く李白自身も評価していたが、現行の教科書において見かけることは少ない。名勝「黄鶴楼」は唐代以降数多く詠まれ、詩題としての伝統を有してきたことは改めて注目されてもよいところである。中でも前出の李白の送別詩は中学校の国語教材の中に採録されており、遠近法を取り入れて雄大な自然の中に溶け込む視点で描かれた名詩であることは疑いなく、その傑作として注目を浴びた(1)。唐詩における詩語の観点から矢嶋美津子は当該詩における唐代前後の受容状況を考察しているが、これもかなり限定的なものと言わざるを得ない(2)。わが国において漢詩文化が深く根付いたものの、それぞれの名詩の詩語に焦点を当てた具体的な考察はほとんどなされてこなかった。このような研究状況であれば、漢詩はあくまで外国古典としての一つの表現手段に過ぎないとの誤解を与えるものになってしまうことが懸念される。

わが国の文学表現の影響を知るうえで、当該詩の受容状況を把握することは大変重要である。本稿は漢詩「黄鶴楼」がわが国でどのように受容されて定着したのか、日本漢詩を中心に据えて中世から近代までの考察を試みるものである(なお、漢文には適宜訓点・書き下し文を施した。傍線は筆者による。以下同じ)。

二 唐詩「黄鶴楼」の漢籍における用例

唐詩「黄鶴楼」(A)は盛唐の崔顥による名詩であるが、李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」(B)の方が義務教育段階の教科書に採録されたこともあり、わが国では人口に膾炙されてきた。江戸時代の儒者三浦梅園は「李白黄鶴楼二上り、此詩ヲ見テ、眼前有^レ景道^{コト}不^レ得、崔顥題^レ詩ヲ在^リ二上頭^ニ」(『詩轍』巻三)と述べ、李白自身が崔顥詩を賞賛したことにも言及する。「黄鶴楼」は現在の湖北省武漢市にかつて存在した名楼であり、唐代以降多く詩題に詠まれているものの、わが国への影響を踏まえると、以下の三詩に注目することができる。本稿では(A)、(B)に加えて李白の「与史郎中欽聴黄鶴楼上吹笛」(C)を含めた三首

に当たることがあるものと考えた。以下、三首を順に掲げる。

A 黄鶴楼 崔顥（『唐詩選』巻五）

昔人已乘黄鶴去 昔人已に黄鶴に乗りて去り

此地空余黄鶴楼 此の地空しく余す黄鶴楼

黄鶴一去不復返 黄鶴一たび去りて復た返らず

白雲千載空悠悠 白雲千載空しく悠悠

晴川歴歴漢陽樹 晴川歴歴たり漢陽の樹

芳草萋萋鸚鵡洲 芳草萋萋たり鸚鵡洲

日暮鄉關何処是 日暮郷関何れの処か是なる

煙波江上使人愁 煙波江上人をして愁へしむ

【形式】七言律詩／【押韻】楼・悠・洲・愁（下平声十一尤）

【詩意】太古の仙人は黄鶴に乗って飛び去り、この地には

黄鶴楼だけが空しく残されている。黄鶴は飛び去ったきり

二度とは戻らず、白雲は千年もの長きにわたり天空に漂っ

ている。晴れた川にははつきりと漢陽の樹木が見え、美し

い花は鸚鵡洲に咲き誇っている。日が暮れて故郷はどこに

あるのか、川上のもやは私（作者）を悲しませるのだ。

B 黄鶴楼送孟浩然之広陵 李白（『唐詩選』巻七）

故人西辞黄鶴楼 故人西のかた黄鶴楼を辞し

烟花三月下揚州 烟花三月揚州に下る

孤帆遠影碧空尽 孤帆の遠影碧空に尽き

唯見長江天際流 唯だ見る長江の天際に流るるを

【形式】七言絶句／【押韻】楼・州・流（下平声十一尤）

【詩意】花霞が煙る三月に黄鶴楼において旧友孟浩然が広

陵（揚州）に下る様子を詠み込んだものである。彼を乗せた

一艘の船が青空の中に消え去って、ただ長江が天の果てま

で流れているのを見ているのみだ。

C 与史郎中欽聴黄鶴楼上吹笛 李白

（『文苑英華』巻二百十二）

一為遷客去長沙 一たび遷客と為りて長沙に去る

西望長安不見家 西のかた長安を望むも家を見ず

黄鶴楼中吹玉笛 黄鶴楼中玉笛を吹く

江城五月落梅花 江城五月梅花落つ

【形式】七言絶句／【押韻】沙・家・花（下平声六麻）

【詩意】左遷されて長沙へ行く途次、黄鶴楼から西を見て

も長安にある我が家が見えるはずもなく、楼中で誰かが笛

を吹く音がするが、それは名曲「落梅花」であった。長江の

流れを望む武昌にて五月に季節外れの梅が散り落ちる。

上記のうち、厳密に言えば**A**・**B**の韻律構造は近体詩の平仄

を備えていない「失粘（拗体）」である。三者の内容を比較する

と、**A**は黄鶴楼にまつわる仙人譚に触れながら、川もやを見な

がら望郷の念を詠み込んでいる。**B**は黄鶴楼の絶景を背景に友

人孟浩然との酒宴を送別の催しつつ、視点は長江を移動する孟

浩然を乗せた船に視点が置かれている。**C**は左遷されて長沙に

赴く際に黄鶴楼にて玉笛の音色がし、名曲「落梅花」を聴きながら季節外れの落梅を見ているものとなる。この三つの視点の違いを繕きながらわが国翻案詩の受容状況を確認する。

A「黄鶴楼」における仙人譚については既にいくつかの報告がある(3)。それらを照合して整理したい。「黄鶴楼」の成立時期は唐代の李吉甫『元和郡県志』巻二十七に次のようにある。

隋平^ゲ陳^レ、改^メ鄂州^ヲ一^ニ為^ル鄂州^ト。州城^ハ本^ハ夏口城^{ナリ}。
吳ノ黄武二年、城^キ江夏^ニ一^{以テ}安^シル^ニ屯^成ノ地^ヲ一^也。城西^ニ臨^ミ大^口ヲ一、西南角^{因リテ}磯^ヲ為^ル樓^ヲ。名^ク黄鶴樓^ト。

ここでは隋が南朝陳を平定して鄂州を鄂州としたこと、吳の黄武二年(二二三)に黄鶴楼が建てられたとする記事がある。また、『南齊書』巻十五には「夏口城^ハ扞^{リテ}黄鶴磯^ニ、世^ニ伝^フ仙人子安^乗リテ^ニ黄鶴^ニ一過^グル^ニ此^ノ上^ヲ一也」とあり、子安なる人物が黄鶴に乗って飛び去ったと記され、南朝梁の任昉『述異記』には「荀瓌、字^ノ叔偉、寓^居江陵^ニ、戀^フ江夏^ノ黄鶴樓^上」(『芸文類聚』巻六十二)とあり、荀瓌が江夏の黄鶴楼に休憩した様子が描かれており、南宋の祝穆『古今事類全書後集』巻四十二において荀瓌は鶴に跨がった「黄鶴楼仙」と称される。北宋の樂史『太平寰宇記』巻百十二には「黄鶴楼^ハ在^リ一^ノ西^ニ二百八十步^ニ。昔^ハ費禕^登仙^{シテ}每^日乘^{リテ}黄鶴^ニ一^于此^ノ樓^ニ一^戀フ^レ故^ノ号^ト」^テ為^ス黄鶴樓^ト。唐ノ崔顥^ニ有^{リテ}登^ル黄鶴樓^ニ一詩^上云^フ」^とあり、三国時代の蜀漢の費禕が鶴に乗って飛び立ったものと伝え

ている。より詳細な「黄鶴楼」仙人譚の由来については「善悪報応録」にも取りあげられているが、江戸時代、伊勢桑名藩の儒医である伊藤玄節は当該故事について次のように解説する。

四十黄鶴楼

善悪報応録

辛氏ト云者酒ヲ沽。一先生来テ好酒ノ吾ニ飲シムベキ者有ヤト云。辛氏巨杯ヲ以テ飲シム。明日復来ル。如クレ此ノスルコト半載、辛倦意ナシ。一日ニ辛ニ謂ク、「多ク酒債ヲ負。銭ノ汝ニ酌ルナシ。」遂ニ小藍橘皮ヲ取テ鶴ヲ壁ニ画テ曰、「客来テ飲バ、拍^レ手歌シメヨ。鶴モ必^ニ踰^ヒ延^{シテ}舞^ン。」客至レバ果シテ其ノ言ノ如ス。橘皮ヲ以テ画ク処ノ色黄也。人ト是ヲ黄鶴ト云。觀ト欲ル者ハ千金ヲ費スベシ。十年ノ間、家ニ巨万ヲ置。一日先生ノ曰、「向ニ飲^レ酒^ヲ答^ルル^ハ処^薄ヤ否。」辛謝シテ曰、「画^レ鶴^ヲ頼^テ今^百倍^ニ至^ル。少^シ留^レ。」^レ。家酒掃ヲ供^ン。先生笑^ヒ曰、「吾^レ豈^ハヲ求^ンヤ。」^レ。笛ヲ吹コト数弄。白雲空ヨリ下^ル。画鶴先生ノ前ニ飛^ニ。遂ニ鶴ニ跨^テ空ニ乗^{ジテ}去^ル。飛昇スル処ニ於テ樓ヲ建^テ黄鶴樓^ト名^ス。(4)。

〔愈愚随筆〕巻三 延宝元年(一六七三)

辛氏なる者が酒屋を経営し、ある先生が半年間にわたって酒を飲み続け、その酒代として壁に橘の皮を用いて「黄鶴」の絵を描く。先生は酒客が来た際に拍手すると「黄鶴」もまたその中で舞い踊る。これが評判となり十年間で巨万の富を築くに至る。

ある日、先生が辛氏のもとを訪ねると、辛氏は謝辞を述べて数日間逗留して接待することを願ひ出る。先生はその提案を断つて笛を吹いて白雲を呼び寄せると、そのまま鶴に跨がって飛び去る。その後、この地に楼閣を建てて「黄鶴楼」と名付けた。

唐代以降、「黄鶴楼」は数多く詠まれ、盛唐の孟浩然「鸚鵡洲送王九之江左」、中唐の劉禹錫「武昌老人說笛歌」、晚唐の杜牧「送王侍御赴夏口座主幕」、北宋の蘇軾「李公挾求黄鶴楼詩因記旧所聞于馮当世者」などがある。盛唐から三百年を経た南宋の陸游は乾道六年(一一七〇)に四川の官職を任ぜられ、故郷の紹興(浙江省)を出て揚子江をさかのぼり、家族とともに赴任した五カ月余りの船旅の様子を『入蜀記』にまとめた。陸游が実際に黄鶴楼を訪ねたのはこの年の八月二十八日のことである。

二十八日、同_レ章冠之秀才甫_ト登_リ石鏡亭_ニ訪_テ黄鶴楼_ノ故址_ヲ。石鏡亭者、石城山ノ一隅_ニ在_リ。正_ニ枕_シ大江_ニ一_ノ西_ハ与_二漢陽_一相對_ス。止_タ塔隔_ツル_ノ水_ヲ。人物草木可_シ数_フ。(中略)黄鶴楼_ノ旧伝_ニ費禪飛_ゴ升_リ於_レ此_ニ、後忽_レ乘_リ来_リ歸_ル。故_ニ以_テ名_{ツク}レ_ル楼_ヲ。号_シ為_ス天下_ノ絶景_ト。崔顥_ノ詩_ニ最_モ傳_ヘリ而_{シテ}太白_ノ奇句_得タル_ニ於_レ此_ニ者_尤多_シ。今楼_ハ已_ニ廢_レ、故址_モ亦_不復_タ存_セ。問_{ヘバ}、老吏_ニ云_フ「在_リ石鏡亭南楼之間_ニ、正_ニ対_ス鸚鵡洲_ニ」。猶_ホ可_シ想_フ見_ス其_ノ地_ヲ。楼榜_ヲ李監_ノ篆石刻_ノミ独_リ存_ス。太白登_リ此_ノ楼_ニ送_ル孟浩然_一詩_ニ云_フ、

孤帆遠_ク映_{ジテ}碧山_ニ一_ノ尺_キ
惟_ダ見_ル長江_ノ天際_ニ流_ル

蓋_シ帆樑_ノ映_{ズル}ハ遠山_ニ一_ノ尤_モ可_シレ_ル觀_ル。非_{ザレバ}江行_ノ久_シ
キニ、不_レ能_ハ知_ル也。
(巻五)

この中で陸游は仙人譚に焦点を当てた崔顥詩に注目する一方で、李白の送別詩にも言及するものだが、楼跡を訪ねた陸游自身も「黄鶴楼」を詠んだ漢詩を多く残した(5)。このように「黄鶴楼」は第一義的にその神秘性に魅力があつたことを確認したい。

三 詩偈としての「黄鶴楼」——宋代から中世五山まで——

また、名勝「黄鶴楼」は「詩偈」の中に取り込まれた点も特徴の一つである。「詩偈」とは禅宗における漢詩(韻文の経文)を指す。禅宗と漢詩文の結びつきは強く、わが国では中世の五山文学の中で名詩を詩題に取りながら多くの漢詩文にも詠み込まれた。例えば、江戸初期の後水尾天皇による勅撰漢詩集『翰林五鳳集』には「楓橋夜泊」・「瀟湘八景」・「寒江釣雪」などの名詩を詩題に取った五山僧の翻案詩が所収される。こうした漢詩の一節は禅語として取り込まれて人口に膾炙した。有名などころでは、戦国時代に甲斐国恵林寺で織田信長の火攻めにあつた快川禅師が臨終の際に口にした「心頭滅却すれば火も亦た涼し」があるが、これももともとは晩唐の詩人杜荀鶴の「夏日題悟空上人院」の転結句「安禅不必須山水 滅却心頭火自涼(安禅は必

ずしも山水を須もとひず 心頭を滅却すれば火も自ら涼し」(第四十三則評唱)が宋代の禪語録『碧巖録』に収録されて定着した言葉であり、両者の親和性を物語るものである。

晩唐期、禪宗黄檗希運の弟子臨濟義玄は三年もの間ひたすら行住坐臥に専念していたが、師に參禪(問答)をすることがなかった。臨濟が大悟に至っていないと感じた黄檗は三度にわたって臨濟に警策を加えた。臨濟は理由がわからず高安の大愚和尚に師の真意を尋ねると、大愚は黄檗の教えが一切を掃尽する自在な活機略を形容した意図を解説する。後世、この一件を指して「拳拳倒黄鶴楼、一趨翻翻鸚鵡洲」と表現され、後世の禪語に大きな影響を与えた(6)。つまり、「黄鶴楼」や「鸚鵡洲」といった絶景でさえも一撃でぶち壊して雑念を捨て去るべきことを論ず師のはからいであった。この逸話は「臨濟三頓」と呼ばれるが、北宋の雲門派の雪竇重頌は「啐啄の機は是れ仏家の家風」に加えて「一拳拳倒黄鶴楼、一趨翻翻鸚鵡洲」と評した(『碧巖録』第十六則「鏡清啐啄機」(7))。一方で、北宋期に臨濟禪を広めた楊岐方会の弟子で楊岐派二世の白雲守端はこの「臨濟三頓」の逸話をもとに頌して、痛棒もまた風流であると評した詩偈を作ったが、これは南宋の希叟紹曇『五家正宗贊』にも所収されている。白雲守端の法統は五祖法演を経て圓悟克勤へと承け継がれ、圓悟克勤は雪竇重頌の禪語を『碧巖録』にまとめた。

① 白雲守端 (『禪宗頌古聯珠通集』卷二十一)

一拳拳倒黄鶴楼 一拳に拳倒す黄鶴楼
一趨翻翻鸚鵡洲 一趨に趨翻す鸚鵡洲

有意氣時添意氣 意氣有る時には意気を添へ

不風流処也風流 風流ならざる処も也た風流

② 訥堂梵思 (『禪宗頌古聯珠通集』卷十六)

黄鶴楼前鸚鵡洲 黄鶴楼前鸚鵡洲

夕陽西去水流東 夕陽は西に去りにて水は東に流る

要知諸仏居何処 知るを要む諸仏何れの処にか居る

風葉蕭蕭月滿楼 風葉蕭蕭として月楼に満つ

③ 心間曇貫 (『禪宗頌古聯珠通集』卷十六)

黄鶴楼前題一篇 黄鶴楼前題一篇

無限措大失平仄 無限の措大平仄を失ふ

長沙一只眼長長 長沙の一只眼長長

今古何曾有踪迹 今古何ぞ曾て踪迹有る

④ 懶庵道枢 (『禪宗頌古聯珠通集』卷十六)

百千諸仏問來由 百千の諸佛仏由を問ふ

崔顥曾題黄鶴楼 崔顥曾て題す黄鶴楼

雪后竹籬梅乱放 雪後の竹籬梅乱れて放ち

一枝臨水最風流 一枝水に臨み最も風流

⑤ 天目文礼 (『禪宗頌古聯珠通集』卷十六)

百千諸仏居何士 百千諸仏何士にか居る

崔顥曾題黄鶴楼 崔顥曾て題す黄鶴楼

倒腹傾腸猶不会 倒腹傾腸猶ほ会はず
長江千古自東流 長江千古東より流る

上記のように「黄鶴楼」を用いた「詩偈」は同様の言い回しが保たれてきた。このうち、「黄鶴楼前鸚鵡洲」は南宋の虚堂智愚『虚堂和尚語録』巻九や希叟紹曇『五家正宗贊』（雲居舜禪師）に、「崔顥曾題黄鶴楼」は法応宝鑑『禅宗頌古聯珠通集』にも引用されている。一方でわが国でも鎌倉時代以降、五山僧の「詩偈」において黄檗の用いた「黄鶴楼」は詠み込まれて伝わる。

⑥ 規庵祖円（『延宝伝燈録』巻十九）

一躍躍翻黄鶴楼 一躍に躍翻す黄鶴楼
一拳拳倒鸚鵡洲 一拳に拳倒す鸚鵡洲
臨行一著元無別 行に臨みて一著元別れ無し
黄鶴楼前鸚鵡洲 黄鶴楼前鸚鵡洲

鎌倉時代の規庵祖円は信濃出身の臨濟僧。弘安三年（一二二八）〇、建長寺の無学祖元に入門し、その後東福寺の無閑普門の教えを受け、正応五年（一二九五）南禅寺の法嗣となる。正和二年（一二三二）の辞世に際して右の「詩偈」を創作している。

⑦ 無隠元晦（『無隠禪師無孔笛』巻四）

一拳拳倒鸚鵡洲 一拳に拳倒す鸚鵡洲
一躍躍翻黄鶴楼 一躍に躍翻す黄鶴楼
無吼笛声難掩耳 無吼笛の声耳を掩ひ難く
掃鳥唾唾過林丘 掃鳥唾として林丘を過ぐ

南北朝時代の無隠元晦は十数年間にわたり元に滞在し、中峰明本の法嗣となる。帰国後は大友氏泰に招かれ、筑前の顕孝寺や聖福寺にはいる。京都建仁寺や南禅寺の住持を歴任。

⑧ 大休宗休（『大休和尚頌古』）

黄鶴楼前鸚鵡洲 黄鶴楼前鸚鵡洲
天然境物自清新 天然の境物自ら清新
一從崔浩留題後 一たび崔浩留題の後より
千古風流能幾人 千古の風流能く幾人なるか

戦国時代の臨濟僧大休和尚は京都の東福寺永明庵で出家した後、龍安寺の特芳禅傑に入門してその印可を受ける。西源院・龍安寺の住持を経て妙心寺の住持となったが、晩年は靈雲院を開創した。また、国守今川義元と「黒衣の宰相」と称された太原雪斎の招きにより、駿河国に臨濟寺を開山する。

この「詩偈」は後世にまで伝わり、東陽英朝『禅林句集』にも「一拳拳倒黄鶴楼 一躍躍翻鸚鵡洲」と所収され、多々良一龍『後太平記』巻三十二（元禄五年（一六九二））における大内義隆一族滅亡の際に「一拳々頭黄鶴楼 一踢踢翻鸚鵡洲」を唱えた場面も見え、広く浸透した様子が窺える。こうした「詩偈」中の「黄鶴楼」は禅語録において理想郷としての位置づけであり、警策により悟りに入る前の夢想の境地であった。漢詩と禅宗を結びつける一つの事例として着目することができるだろう。

四 わが国における「黄鶴楼」受容―近世から近代まで―

わが国において「黄鶴楼」・「鸚鵡洲」は鎌倉時代以降しばしば引用される。永仁四年（一二九六）以前に成立したと見られる鎌倉の極楽寺の僧明空撰による早歌を所収した『宴曲抄』巻下には「二千里の須磨の浦伝ひ。客帆寒き夕塩風や舟人さはぐ爾保の海。鸚鵡洲の夜の泊。臨船に歌の声愁て明月涙を瑩らん」とある。また、室町時代の康永元年（二三四二）に坂十仏が伊勢神宮に参詣した記録『伊勢太神宮参詣記』には「山もととをき湊江のかたをみわたせば、河のうき洲はみちくるしほにかくれ、鸚鵡洲のあとなきいにしへも目のまへにうかび、あしべのたづのいづくともなくとびさるこゑをきけば、黄鶴楼の古きためしものころの底に近し」とある。江戸時代以降に詠まれた日本漢詩における「黄鶴楼」は果たして第二節の **A** **C** いずれに拠ったものだろうか。以下、黄鶴楼の翻案詩（七言律詩）を取りあげて考察する。なお、崔顥詩を典拠とする詩語には傍線を施した。

① 新井白石「答赤石梁教授」（『白石先生余稿』巻二）

故人曾下読書帷 故人曾て下す読書の帷
尺帛并伝寄我詩 尺帛并びに伝ふ我に寄する詩
靈運応同帆海日 靈運まよ応に帆海の日を同じくすべく
伯鸞寧似出関時 伯鸞いづつ寧んぞ出関の時に似たらんや
赤松山上仙何在 赤松山上仙何いづくにか在る
黄鶴楼中客可思 黄鶴楼中客思ふべし

春入江城梅自落 春江城に入りて梅自ら落ち

当初玉笛不勝吹 当初の玉笛吹くに勝へず

【押韻】帷・詩・時・思・吹（上平声四支）

【作者】江戸中期の旗本にして朱子学者。六代將軍徳川家宣に侍講として仕え、「正徳の治」に携わった。

【詩意】播磨国明石藩に仕官する梁田蛻巖に答えた詩である。かつて旧友（蛻巖）は読書のために帷を下ろしたが、その中のわずかな書き付けに私に向けて詠んだ詩があった。

六朝時代の文人謝靈運は海に出て周遊し、後漢時代の隱者梁鴻（伯鸞）は妻を伴って函谷関を出た。戦国時代に築かれた赤松氏の山城龍野城にも仙人は果たしているのだろうか。黄鶴楼中で旅客は思いをめぐらすことだろう。春は江畔の城に入り梅は自然と落ちるが、そのときの気持ちでは玉笛を吹き鳴らすことにとても耐えられるものではない。

② 宇野明霞「擬登黄鶴楼」（『明霞先生遺稿』巻二）

一從飛閣起磯頭 一たび飛閣の磯頭に起こりしより
詞客登臨幾壯遊 詞客登臨して幾壯遊
鸚鵡洲荒名更出 鸚鵡洲荒れて名更に出づ
仙人駕去跡猶留 仙人駕し去りて跡猶ほ留まる
白雲自見千年色 白雲自ら見はる千年の色
玉笛誰思五月愁 玉笛誰か思はん五月の愁ひ
世事悠悠逐江水 世事悠悠江水を逐ひ

空令感慨満長流 空しく感慨をして長流を満たしむ

【押韻】頭・遊・留・愁・流（下平声十一尤）

【作者】近江出身の儒者。徂徠の影響を受けて京都に古文辞学を広めたが、後に折衷学を唱えて徂徠説に異を唱えた。

【詩意】かつて黄鶴楼が長江の磯頭に築かれたときより詩人は競つてこの地に足を運んで登臨した。鸚鵡洲は荒れ果てても名高く、仙人は鶴に乗つてその跡はこの地にとどまる。白雲は千年の色を表し、玉笛を聞いて誰が五月の愁いを思うことだろうか。人生はゆつたりと川の水を追う。古人の壮遊を思うと感慨が満ちて流れ去ることはできない。

③坂井敬亭「梅花」（『東瀛詩選』卷四十一）

平生好是伴松筠 平生好きは是れ松筠を伴ふ

相色由来画不真 相色由来画真ならず

帯雨却知珠有淚 帯雨却りて知る珠に涙有り

倚風初覺玉無塵 風に倚りて初めて覚ゆ玉に塵無く

羅浮山下寄愁客 羅浮山下に愁ひを寄する客

黃鶴楼中吹笛人 黃鶴楼中笛を吹く人

一種香魂零落後 一種の香魂零落の後

飛飛又看壽陽春 飛飛又看る壽陽の春

【押韻】筠・真・塵・人・春（上平声十一真）

【作者】紀伊和歌山藩儒にして祇園南海の弟子。

【詩意】普段より梅花は松竹の取り合わせがとてもよい。

その色調には由来があるも、絵は真実を写すものではない。

雨は涙を帯び、風は雪を伴っていないことを感じる。羅浮山のもとで愁客を引きつけ、黄鶴楼中には笛を吹く人がいる。梅の花の精が零落したあとには飛散するも、梅化粧をした六朝時代の寿陽公主のような春支度を目にする。

④大城壺梁「送池君之鶴崎」（『壺梁先生遺稿』卷三）

輕履翩然康樂偉 輕履翩然として康樂の偉

生涯樂事在林丘 生涯の樂事林丘に在り

赤膚山下餐霞過 赤膚山下霞を餐して過ぎ

黃鶴楼頭乘月遊 黃鶴楼頭月に乗りて遊ぶ

君自襟懷稱豁達 君自ら襟懷して豁達を稱し

誰人琴酒最風流 誰人か琴酒最も風流なる

休隨凝露台辺去 凝露台辺に隨ひて去るを休めよ

仙地風光易滯留 仙地風光滯留易し

【押韻】丘・遊・流・留（下平声十一尤）

【作者】肥後熊本藩の儒学者。藩校時習館で学び、その助教となる。また、大坂の懷徳堂の諸賢との交流があった。

【詩意】豊後国鶴崎に行く池氏を見送った詩。下駄（輕履）の音も軽やかな謝靈運（康樂）の人柄。生涯の楽しみは隠遁の地にある。阿蘇山（赤膚山）のもとで餐霞する仙人のような生活を送り、黄鶴楼上で月に乗つて遊ぶ。あなたは自ら胸中度量の広さを稱し、誰が琴酒において最も風流である

かを論じていた。名勝佐賀景(凝露台)のそばから立ち去らずにいてほしい。仙地の風景は逗留しやすいいものだから。

⑤島津天錫「黄鶴楼」(『名山楼詩集』)

千古崔嵬黄鶴楼

白雲来玄憶仙遊

金風葉下洞廷水

暮色草寒鸚鵡洲

笛裏落梅人不見

天涯過雁自含愁

鄉関万里烟波渺

楚客登臨悲素秋

【押韻】楼・遊・洲・愁・秋(下平声十一尤)

【作者】薩摩藩島津家支族にして加治木島津家六代当主。

【詩意】太古の昔より名高い黄鶴楼、白雲が来玄して仙郷を思う。秋風が葉を落とす洞廷湖の水。夕闇に草木は寒くなる鸚鵡洲。笛の音色が聞こえる中で落梅するも人は見えない。天の果てには雁が飛び、その様子は愁いを含んでいた。故郷は万里遠く、もやの立ちこめた水面は遙かに霞んで見え、旅人(楚客)は高樓に登って秋を悲しむ。

⑥向井友章「寄題江都梅津氏望瀛亭」(『滄浪詩集』卷二)

麗譙高帯彩雲浮

環海烟波入檻流

麗譙高く彩雲を帯びて浮かび

環海烟波檻に入りて流る

聞道樽盈常会客

定知機息独随鷗

還輕歌舞滕王閣

豈羨神仙黄鶴楼

何日当成再遊志

憑軒載賦望瀛洲

【押韻】浮・流・鷗・楼・洲(下平声十一尤)

【作者】薩摩藩士として江戸の昌平齋にて学ぶ。島津重豪に登用されて藩内の菓草園の管理に携わった。

【詩意】江戸の梅津氏への寄題した詩歌。高樓(麗譙)は茜雲を帯びて浮かび、海を巡る波は欄干にまで押し寄せる。酒樽は満ち足りて常会の客で賑わうが、『列子』のように企

みの心(機息)でただ鷗に寄り添うのみである。かつて滕王閣でおこなわれた歌舞は既になくなり、神仙の黄鶴楼を羨むこともあるまい。いつの日か再遊の志を立てて手すりに

もたれて賦を歌いながら仙界(瀛洲)を望みたい。

近世における用例からは様々な聖地を「黄鶴楼」に見立てて詠み込み、観念的な世界観を喚起するものであった。近代に至るまで「黄鶴楼」は木造建築であったため、何度も焼失と再建が繰り返されたが、清末の同治七年(一八六八)に最後の木造古楼が完成したものの、光緒十年(一八八四)に太平天国の乱のさなか長髮族により焼失した。その後、昭和六十年(一九八五)六月

に壮大な新楼が完成する。「黄鶴百年にして帰る」と話題になったものが、現存の黄鶴楼である(8)。明治二十七年(一八九四)七月に日清戦争が起こって翌年四月まで続くも、明治三十年代には多くの知識人が現地を訪れて黄鶴楼の廃墟を嘆いている。

⑦小牧昌業「登黄鶴楼」(『海外観風詩集』)

高楼巍立倚巖城 高楼巍立して巖城に倚り

此日登臨世外情 此の日登臨世外の情

欄外波濤江水闊 欄外の波濤江水闊く

漢陽烟樹夕暉晴 漢陽の烟樹夕暉晴れ

山川縹緲湖湘地 山川縹緲として湖湘の地

桂壁淋漓崔李名 桂壁に淋漓たる崔李の名

万里来遊趁前哲 万里来遊して前哲を趁ふも

風流終不負此生 風流終に此の生を負はず

【押韻】城・城・晴・名・生(下平声八庚)

【作者】薩摩藩出身の漢学者にして官僚、政治家。江戸で塩谷岩陰に学ぶ。明治以降は知事や貴族院議員を歴任する。

【詩意】明治五年(一八七二)の清国外遊時の一節。黄鶴楼がそびえ立ち、この日に登臨して世俗からの超越を感じる。欄干外の波濤が長江に広がり、漢陽のもやがかった木々に夕日が晴れている。山川は果てしなく広がり湖沼の地である。桂の壁には淋漓とした字で崔顥や李白の詩が掛かっている。日本から先哲を追い慕うもその風流心は私の及ぶ所

ではない。因みにその十四年後に同地を訪れて黄鶴楼の廃墟を目の当たりにした七言絶句「黄鶴楼廢趾」には「十四年前過此地 高楼何幸得登游(十四年前此の地を過ぐ、高楼何ぞ幸ひにして登游を得たる)」と過去の登楼を懐かしむ。

⑧永井禾原「黄鶴楼址」(『來青閣集』卷二)

吟到扶桑以外天 吟じて扶桑に到り外天を以ふ

登臨有客軫愀然 登臨するに客有りて軫た愀然

江波遥接洞庭水 江波遥かに接す洞庭の水

山色遠連巴蜀烟 山色遠く連なる巴蜀の烟

鶴去仙蹤誰得逐 鶴去りて仙蹤誰か逐ふことを得たる

詩成勝景世争伝 詩成りて勝景世争ひて伝へ

名楼今日空灰燼 名楼今日空しく灰燼

眼底滄桑感變遷 眼底滄桑變遷を感ず

【押韻】天・然・烟・伝・遷(下平声一先)

【作者】尾張藩出身の官僚。鷲津毅堂や森春濤に漢学を学ぶ。海外視察にも積極的に携わる。作家永井荷風の父。

【詩意】明治三十一年(一八九八)春、清国外遊時の一作。吟じながら日本(扶桑)に帰国して異国(外天)を想起する。黄鶴楼の觀光客はもの悲しげな表情を浮かべていた。長江の水はゆったりと洞庭湖まで続き、山模様も遠く巴蜀の煙まで連なっている。鶴が飛び去ると誰が仙人の足跡を追跡することができようか。崔顥の詩が完成してこの絶景は詩

人たちが争って伝えるも、黄鶴楼は現在空しく灰燼に帰した。「滄桑の変（移り変わり）」を目に焼き付けている。

⑨ 本田種竹「黄鶴楼」（『懐古田舎詩存』巻四）

黄鶴仙人安在哉 黄鶴の仙人安いづに在るや

人亡鶴去白雲隈 人は亡く鶴は去りて白雲の隈

山連城郭参差出 山は城郭に連なり参差しんしとして出で

樹帯汀洲迤邐開 樹は汀洲を帯びて迤邐い開き

万里江流無日夜 万里の江流日夜無く

千年文物此楼台 千年の文物は此の楼台

夕陽何限登臨意 夕陽何ぞ限らん登臨の意

独立蒼茫首重回 独立蒼茫して首重ねて回す

【押韻】哉・隈・開・台・回（上平声十灰）

【作者】阿波徳島出身の官僚。東京美術学校の教授や文部大臣官房秘書を歴任し、退官後は自然詩社を主宰する。

【詩意】明治三十二年（一八九九）、清国外遊時の一作。黄鶴の仙人は今どこに在るのか。人はなく鶴は去り白雲の隈がある。山は城郭に連なつてちぐはぐとなり、樹木は中洲を覆いながら続いている。万里の川が流れて日夜なく、千年の文物はこの楼台である。夕陽のため黄鶴楼に登臨を見兼ね、一人で立つて青々とした風景の中で首を巡らす。

⑩ 松平康国「登黄鶴楼」（『天行文鈔』）

昔賢題詠壁間留 昔賢の題詠壁間に留とどめ

万古長江独此楼 万古の長江独り此の楼
黄鶴影空雲杳杳 黄鶴の影空しく雲杳杳

仙人不返水悠悠 仙人返らず水悠悠

大江揺盪檻前月 大江揺盪として檻は月に前まみ

遠樹廻環帆外洲 遠樹廻環として帆は洲を外にす

臨眺勿吟崔顥句 臨眺りんたう吟ずる勿なかれ崔顥の句

烟波根触異郷愁 烟波根こん触ふす異郷の愁しゆ

【押韻】留・楼・悠・洲・愁（下平声十一尤）

【作者】作者は長崎出身の漢学者にして早稲田大学教授。

【詩意】明治四十年（一八九七）、清国外遊時の一節。かつて崔顥が黄鶴楼の壁に名詩を書きとどめて以来、長江にはこの黄鶴楼が存在するのみだ。黄鶴の影は空しく雲はほかに漂い、仙人は帰らずに川の水が悠々と流れている。長江はゆらゆらとして欄干が月を受け入れ、遠くの木々は林立して帆船は鸚鵡洲を取り囲んでいる。この眺めを目にしても崔顥の黄鶴楼詩を吟じてはならない。川上に立ち上るもやが望郷の憂愁の気持ちに触れるからだ。

⑪ 松田甲「歳晚漢口作」（『皆夢軒詩鈔』巻中）

北馬南船鬢欲皓 北馬南船鬢かみせんと欲す

滔滔曆日大江波 滔滔たる曆日大江の波

游踪不定稀郷信 游踪定めず郷信稀まにして

夙志無成負旧窠 夙志成ること無く旧窠きゆうさを負ふ

黄鶴楼空寒月独 黄鶴楼空しく寒月独りにして

古琴台壞勁風多 古琴台こしんたい壞れ勁風多し

把杯罵倒王侯夢 杯を把りて罵倒す王侯の夢

鸚鵡洲頭一醉歌 鸚鵡洲頭一酔の歌

【押韻】 幡・波・窠・多・歌（下平声五歌）

【作者】 陸奥国会津藩出身の測量技術者。野口寧斎や森棟南に漢詩を学ぶ。朝鮮総督府の官僚として測量に携わる

【詩意】 明治四十一年（一九〇八）冬、清国外遊時の一作。各地を旅行する中で、今にも老いが迫ろうとする。月日が流れる様子は長江の波のようだ。旅行の軌跡を定めずにさすらい、故郷からの手紙も稀となる。青雲の志も果たせぬままに古い考えに固執してしまふ。黄鶴楼は空しく佇み、古琴台も壞れて強風が吹きつけていた。寒月も孤独に照らすのみである。杯を手にとりて王侯貴族の夢を笑い、鸚鵡洲のほとりで醉歌を口ずさむのである。

上記の用例からわが国では、**A**崔顥詩の【仙人・望郷要素】に李白詩の【玉笛・梅花要素】が組み合わさったものが多く、**B**李白詩の【送別・航行要素】のものは管見の限りあまり見られなかった。このように「黄鶴楼」には仙人譚の憧憬の表現手段として一定の理解が示されたことがあった。ただし、**B**の要素を備えた一例には次のようなものが見られる。

⑫清田龍川「霧中帆影」（『龍川詩鈔』卷五）

沈沈曉霧大江頭 沈沈たる曉霧大江の頭

送客俱登黄鶴楼 客を送りて俱に登る黄鶴楼

多少征帆迷遠影 多少の征帆遠影に迷ふ

不知誰是故人舟 知らず誰か是れ故人の舟

【押韻】 頭・楼・舟（下平声十一尤）

【作者】 越前福井藩儒江村北海の子にして清田儋叟の嗣子。【詩意】 夜更けの朝霧が長江のほとりに漂う。客を送つとともに登る黄鶴楼。多くの船舶が霧の中にさまよい、どれが旧友を乗せた舟か判別できない。

近世・近代には「黄鶴楼」を詠んだ漢詩はいくつも見受けられるものの、彼らが念頭に置いていたものは崔顥詩の【仙人・望郷要素】をベースに李白詩の【玉笛・梅花要素】を組み合わせたものであった。現在は李白詩の「送黄鶴楼孟浩然之広陵」ばかりが教材として取り扱われる傾向があるが、受容史の観点から崔顥詩にも改めて重点を置いて取り扱うべきものと考えられる。

五 まとめとして

本稿では崔顥の黄鶴楼詩を中心にその後の受容状況を確認した。現在、「黄鶴楼」は李白の「送黄鶴楼孟浩然之広陵」により知られるが、宋代の禅僧間において「黄鶴楼・鸚鵡洲」の語彙は詩偈の中に盛んに詠み込まれたため、崔顥詩が中心であったことが理解できる。近世以降は「黄鶴楼」は崔顥詩に加えて李白詩

でも「与史郎中欽聽黃鶴楼上吹笛」の要素が添えられた翻案詩が詠み込まれた。これは送別詩よりも仙人譚として受容されたためであったと考えられる。わが国において「黄鶴楼」は觀念上の理想郷として投影されていた。近代以降、特に現地にわたって太平天国の乱で焼失した黄鶴楼の廢墟を目の当たりにして喪失感を詠み込んだ作品も多く見られた。同様のことは、名詩「楓橋夜泊」にも言える。やはり、清末の太平天国の乱により灰燼に帰した寒山寺の鐘にも近代文化人たちの郷愁が寄せられる。

江戸時代には服部南郭が校訂した『唐詩選』（享保九年（一七二四））が広く読まれたことにより、人々に崔顥詩や李白詩が身近なものとして愛唱された経緯がある。授業ではとかく唐詩の解釈に主眼が置かれるが、わが国における日本漢詩としての受容状況を把握することで、国語教材としての「黄鶴楼」のイメージが学習者にも立体感を持つて定着するものと考えられる。

【注】

- (1) この一例として、渡部英喜「李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩考―その解釈をめぐって―」（『盛岡大学紀要』第十九号 二〇〇〇年三月）、大橋賢一「李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」における「煙花」の解釈」（『中国文化 研究と教育』第六七号 二〇〇九年七月）などがある。
- (2) 矢嶋美津子「盛唐崔顥の「黄鶴楼」詩の本歌とする詩―名勝の懐古から郷愁を呼び起こす構想の系譜―」（『唐詩の系譜 名詩

の本歌取り』研文出版 二〇一八年十月）

- (3) 松崎治之「崔顥「黄鶴楼」考―伝説をふまえた叙情詩の世界―」（『筑紫国文』第八号 一九八五年六月）、寺尾剛「李白における武漢の意義―「詩的古跡」の生成をめぐって―」（『中国詩文論叢』第十一号 一九九二年十月）、吉永壮介「費禪登仙考―黄鶴楼と万里橋の逸話をめぐって―」（『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第三九号 二〇〇七年十二月）、高橋未来「崔顥「黄鶴楼」詩の「晴川」少考―解釈の多義性をどう授業に活かすかとの観点もあわせて―」（『学芸国語国文学』第五十号 二〇一八年）
- (4) 辛氏の当該逸話は長林樵隱『豊薩軍記』巻一（寛延二年（一七四九））にも所収される。
- (5) 陸游の黄鶴楼詩には「黄鶴楼」（『劔南詩稿』卷十）、「夏夜对月」（同卷四十六）や「旅次有贈」（同書卷六十一）がある。
- (6) 上坂宗育「風流ならざる処また風流」参照。（『茶道の研究』17（6） 三徳庵 一九七二年六月）
- (7) 『碧巖録』第三十六則「長沙逐落花回」には長沙景岑が崔顥の黄鶴楼詩における後世への影響の大きさについて語っている。
- (8) 馮天瑜著・田宮昌子「天南地北「黄鶴楼志」序」三〇六頁。（愛知大学現代中国学会『中国21』 二〇〇〇年五月）

（ひぐちあつし／狭山ヶ丘高等学校）